

〈論文〉

## 江戸の怪談にみる死生観

佐藤 弘夫

### はじめに

日本の思想や文化を考えると、日本人はもとより外国人にとっても興味深いテーマの一つに、幽霊があるのではないだろうか。幽霊は落語・歌舞伎・浮世絵の題材として恰好のものだった。江戸時代には「東海道四谷怪談」のお岩や「皿屋敷」のお菊〔図版1〕は、だれもがその名前を知る怪談界のスーパースターだった。幽霊をめぐるたくさんの怪談が日々高座にかけられ、生々しい復讐のシーンを描いた浮世絵が大量に世間に流布した。その系譜は現代の「学校の怪談」や日本発のホラー映画にまで継承されているのである。



図版 1

幽霊の問題を考えると、そのポピュラリティに加えてもう一つ重要と思われる視点は、それをテーマとした、国境を越えた比較文化論的研究の可能性である。人は死を運命づけられた存在である。そのため、死といかに向き合うかという問題は、人類にとって共通の課題となった。死後の世界がまちがいなく実在すると多くの人が信じる時代になると、人々はこの世での幸福の延長として、死後の世界での安らかな生活を願った。それは他方で、死後も苦しみにあえぐ死者のイメージを増幅さ

せていくことになった。死が普遍的な現象であるがゆえに、不幸な死者——幽霊の問題もまた時空を超えて世界中でみられるテーマとなったのである。

このように、学問的にも重要な対象と考えられる幽霊であるが、本論ではそれについて一つの視点から考察を加えてみたい。それは、なぜ江戸時代に幽霊にまつわる文化が大流行をみせたのかという問題である。

いうまでもなく、死者にまつわる恐怖の物語は、古今東西を問わず語られてきたものである。ところが、日本列島ではその大量発生は近世以降の現象だった。宗教が圧倒的な位置を占めていた古代・中世ではなく、社会の世俗化が進む近世・近代において、なぜ幽霊譚・怪談が隆盛を迎えるのであろうか。

墓と葬送儀礼の変遷を視野に入れて、中世と比較しながらこの問題を考えることによって、近世に発生する大量の幽霊の原因を探ると同時に、中世—近世の移行期に日本列島で起こった死生観のダイナミックな変貌ぶりを明らかにしてみたい。

## 1 日本人は骨を大切にするか

現在の日本では、だれかが亡くなると親族によってお葬式が営まれる。葬式に前後して遺体は火葬され、式の終了後、先祖の骨が納められている家の墓地に納骨される。

死者と親族との関係は、納骨が終わっても途切れることはない。「彼岸」といわれる春分と秋分の日、また「お盆」といわれる夏の一日、遺族は墓に詣でて先祖にあいさつし、その安らかな眠りを祈る。今日の日本では、この「墓参り」という儀式が、季節の変わり目を告げる重要な行事になっている。墓地には死者の名を刻んだ石塔が立ち、墓参の者がまちがいなく故人と対面できるための目印の役割を果たしているのである。

墓を媒介とする先祖との濃密な交流は、しばしば日本古来の伝統と考えられがちである。またそうした風習の背景にある骨を大切にするという觀念も、日本独自のものであると説かれる。しかし、それは決してこの列島上で普遍的に育まれてきた習俗ではなかった<sup>1)</sup>。

たとえば11世紀ぐらいまでの古代とよばれる時代では、天皇家や貴族・高僧などごく限られた一部の人々を除いて、墓が営まれることはなかった。

庶民層の死体は特定の葬地に運ばれると、簡単な葬送儀礼を行った後、そのまま放置されて犬やカラスの餌となった。裕福な人々の間では土を掘って埋葬し、土饅頭型の墳墓を造ることも行われたが、被葬者の名を石に刻むという習慣はなかったし、現代のように定期的に墓参が行われることもなかった。時が流れれば、墳墓もだれのものかわからなくなってしまうというのが、当時の実情だった。平安時代には数代前の天皇の陵墓でさえ、その所在地が不明となる場合があった（『中右記』嘉祥2年3月12日条）<sup>2)</sup>。葬儀が終了すると、故人の骨や遺体に関する関心がほとんど失われてしまったのである。

これに対し、12世紀以降の中世といわれる時代に入ると、新しい葬送儀礼が始まる。聖地＝霊場に対する納骨の信仰である。だれかが亡くなった時、身内のものが火葬骨を袋に入れて首にかけ、特定の霊場に収めるという風習が確立するのである。霊場に対する納骨は最初に高野山や比叡山で始まり、やがて全国各地に広がっていく。いまは当時の様子を偲ぶべくもないが、奈良の元興寺極楽坊もかつては納骨の寺だった。中世には納骨の容器が堂内をすき間なく埋め尽くし、内壁には歯骨を納めた膨大な数の木製五輪塔が釘で打ち付けられていたのである。

中世の納骨信仰には、遺骨に対する死後も継続する縁者の関心を見てとることができる。それ以前の人々が死体や遺骨に見向きもしなかったのに対し、骨を携えて霊場に運ぶという行為には、残された骨になんらかの宗教的な意義を見出していた様子をうかがうことができる。しかし、納骨信仰の場合でもひとたび骨が霊場に収められてしまえば、それ以降骨の行方に関心が払われることはなかった。

日本において遺体・遺骨に対する態度がもう一度大きく転換するのは、16世紀から17世紀にかけてのことだった。この時期を始点とする近世は、親から子へと永続的に受け継がれていくイエ（家）の制度と観念が確立するときであり、それを背景として家の墓地が広く一般化していく時代だった。今日にまで続く「家の墓」の出発点である。死者は所定の家の墓地に埋葬され、子孫による定期的な墓参と供養の習慣が確立する。骨を収める墓には先祖が眠り、そこを訪れればいつでも故人に会うことができるという現代人に通ずる感覚が、しだいに社会に定着していくのである。それは逆の言い方をすれば、自分もまた、死後は墓の中から懐かしい人々の生活ぶりを見続ける

ことができるという意識の目覚めにほかならなかった。

遺骨に対してまったく関心を払うことがなく、遺骸を放置して省みなかった古代の人々。火葬骨を大切に霊場まで運んだ中世の人々。家の墓を作って骨を収め、定期的に墓参を繰り返した近世以降の人々——日本列島に住んできた人々の死者に対する態度は、いくたびも変化している。この三者に、死者や靈魂についての共通する観念を見出すことはきわめて困難であることが予想される。それは、「日本人の死生観」という形で総括されてきたこれまでの通説が、根本的に見直される必要性があることを示すものにほかならない。

日本人は骨を大切にする民族であるという俗説は、遺体を放置することが当たり前だった古代には通用しない。私たちは時代を貫通する民族固有の死生観の存在を前提とすることなく、もう一度史料に即して、この列島で展開してきた死者に対する意識と観念の変化の実態を丹念に発掘していくことが求められているのである。

## 2 変転する靈魂観

それでは、いま見てきたような骨や死体に対する態度の変化の背後に、私たちはいったいどのような死生観の変容を読み取ることができるのだろうか。

墓地を営まない古代人の場合から考えてみよう。当時の史料には、人間について靈魂と肉体という二つの構成要素から成り立っているという認識が広く散見される。人間を霊と肉とによって構成される存在とみる思想は、古今東西を問わず広く見られるものだったが、日本の古代においても、魂は肉体に内在しており、それが離脱して帰ることが不可能になった状態がその人物の死を意味するものと考えられていた。

ひとたび死が確認されたとき、次に直面する最重要の課題は靈魂の安息をいかに実現するかという問題だった。残された肉体や骨は魂の抜け殻であり、もはやただのモノにすぎなかった。古代において、葬地に運ばれた遺体が放置されたままふたたび顧みられることがなかった背景には、遺体をモノと見るこうした観念があったと推測される。また古代仏教が遺体の処理にまったく関与することなく、もっぱら靈魂の成仏を任務としていたのも、遺

骸を軽視するこの時代の社会通念に規定されてのことだった。

魂が離脱した遺骸をモノとして取り扱っていた従来の葬法に対し、12世紀になると霊場が成立し、そこへの納骨信仰が開始される。古代的な社会構造から中世的なそれへの転換が進行する12世紀は、思想や世界観の面でも大きな変動期にあたっていた。仏教の本格的受容と浄土信仰の浸透に伴って、10世紀後半から此土と隔絶した遠い彼岸世界の観念が膨張し、12世紀に至ってこの世と断絶した死後に往生すべき他界浄土の観念として定着をみるに至る。古代的な一元的世界観に対する、他界—此土の二重構造をもつ中世的世界観の形成である。多くの人々は死後、極楽に代表される理想の浄土に再生することを、人生の究極の目標と考えるようになるのである。

こうした世界観の転換に伴い、寺院の奥の院に祀られた聖徳太子・弘法大師などの聖人は、彼岸の仏の垂迹として人を浄土へと導く存在であると規定された。彼らのいる空間（霊場）はこの世の浄土であるとともに遥かなる彼岸の浄土への入口であり、そこへ足を運び祈りをささげることによって、他界浄土への往生が可能になると説かれた。霊場に骨を納めることによって死者の救済が約束されるという観念も、こういった見方の延長線上に成立するものにほかならない。弘法大師が生きたまま瞑想していると信じられた高野山の奥の院に納骨が行われた理由も、ここにあった。

骨を後生大事に携えて霊場まで運ぶという行動の背景には、少なくとも霊場に到達するまでは骨に靈魂が留まっている、という観念が共有されている必要がある。ここから私たちは、死後も一定の期間靈魂はそのまま骨に留まり続けるという、新たな観念の成立を読み取ることができる。生前の健康なときであっても、魂が容易に骨肉から離れた古代とは異なり、中世では骨と魂との結びつきはより永続的で強固なものになっている。ただし、ひとたび靈魂が遠い世界への往生を遂げた暁には、骨は靈魂の依り代ではなく、ただの残骸に過ぎなかった。霊場に収められた遺骨が継続的な供養の対象とならなかった背景には、こうした認識があったと推定される。

古代では、遺骸を離れた死者の靈魂はいつまでもこの世に留まっていると信じられていた。そのため、その靈魂をいかにして無害なものにまで浄化していく（成仏）かが、古代仏教の重要な課題だった。それに対し遠い彼岸のイメージが膨張する中世は、死者がこの世を離れて、遠い浄土に旅立つことが理想と考えられた時代だった。この世に留まる死者、墓に住み着く死者は

救済の実現しない不幸な存在と考えられていた。すべての死者を確実に彼岸世界に送り出すことが、中世仏教の究極の目標だったのである。

### 3 死者と契約する生者

死者がいるべきではないと考えられた中世の墓地から、死者がいつもいて縁者の訪れを待つ近世墓地への転換は、どのようなプロセスを経て実現したのであろうか。

この世を遠い浄土に到達するまでの仮の宿りとみる中世前期の世界観は、14世紀からしだいに変容をみせる。彼岸世界と根源的な救済者のリアリティが中世後期に入ると急速に失われ、人々の主要な関心があの世からこの世のことに移行していく。

これは彼岸世界が衰退・縮小し、現世の重みがそれに比例して拡大していく現象として捉えることができる。近世を経て近代まで継続する社会の世俗化が始まるのである。人々は来世での救済よりも、この世での幸福の実感と生活の充実を重んじる道を選択するようになった。

このような世界観の変容は、当然のことながら当時の人々の死や救済の観念にも決定的な影響を及ぼした。他界の観念が薄らいだいま、死者の行くべき地はもはやこの世と隔絶した遠い浄土ではなかった。人は死して後もなお、現世に留まり続けるのである。成仏は遠い他界への旅立ちと自身が内在する聖性の覚醒ではなく、あたかも心地よい日だまりでうたた寝するような、この世の片隅での安らかな休息にほかならなかった。

この世にいる靈魂の依り代となったのが、遺骨と墓標だった。あらゆる死者の靈魂は遺骨の眠る墓を離れることなく、いつまでもそこに棲み続けるのである。墓地に安らぐ死者が、とりもなおさず「ホトケ」だった。「草葉の陰で眠る」という近現代人が共有する感覚は、こうした転換を経て江戸時代（17世紀）以降に形成されたものだった。

先にも述べたように、17世紀は世代を超えて継続する「家」（イエ）の観念が庶民層にまで広がっていく時代だった。自分たちがいまいるのは先祖のおかげであり、代々のご先祖をきちんと供養しなければならないという認識が人々の間で共有されるようになった。家ごとの墓地が定着し始めるのもこのころだった。こうして江戸時代の初めから、墓地に住んで子孫の訪れを

待っていると考えられた死者の数は急速に増加していくのである。

身近な故人はその生前の姿が偲ばれる懐かしい存在だが、いくら親しい人物でも、やはり死者は不気味な存在であることはまちがいない。まして他人となれば、その気味の悪さはひとしおである。そうした死者に、ふらふらと無秩序にさまよい歩かれたのではたまらない。死者が基本的にこの世にいないと考えられた中世では、こうした不安はそれほど深刻ではなかった。ところが江戸時代になって、死者がいつまでもこの世に滞留すると観念され、しかもその数が年々爆発的に増加するようになると、その不安をどう解消するかが大きな課題となった。

そこで近世の人々は死者とある契約を取り交わすことにした。一つは死者が心静かにくつろぐことができるように、墓地を常にありがたい読経の声が聞こえるようなお寺の境内に作ることである。

この約束を果たすために、17世紀の日本では都市の内部に新たに大量の寺院が建立された。当時は大名の城下町が各地に建設される時期だったが、そこでは都市プランのなかに必ず寺町が組み込まれた。また、寺請制度の定着にともない、列島の津々浦々にまで仏教が浸透していった。寺の境内に一般人の墓地をもたなかった中世以前の寺院に対して、近世寺院は本堂と墓地がワンセットで造られているところにその特色があった。墓標の林立する寺が、日常の光景となった。日本でのお寺と墓との深い結びつきは、このときからはじまるのである。

生者が死者と交わしたもう一つの契約は、近親者が定期的に墓地を訪れ、死者が寂しい思いをしないで済むように心掛けることである。また一年に一度、お盆といわれる時期には死者を自宅によんで、手厚くもてなすことである。お盆には先祖の霊を迎えるためのたき火が焚かれ、霊が滞在するための盆棚が設けられた。死者と生者との折々の交流が、国民的な儀礼として列島に定着していくのである。

こうした条件の代償として、死者は自分の墓地におとなしく留まることを約束させられた。生者の領域と死者の領域が厳密に区別され、普段は相互に相手の領域を侵犯しないことが定められた。死者がこの世に留まるという観念は、中世を飛び越えて古代の精神世界に逆戻りしたようにみえるが、生者の世界と死者の世界が明確に分節化されたところに、両者が混在していた古代とは異なる、近世社会の特色を見出すことができるのである。

この世界の根源に、地域や民族を超えて人々を救済する絶対的存在が実在するという観念を共有していた中世人は、死者の救済の役割を安心してそれらの超越神に委ねることができた。死者は絶対的存在の導きによって、この世から彼岸へ向けての飛翔が瞬時に実現すると信じられていた。しかし、近世人はもはやそうした根源的な救済者のイメージをリアルに思い描くことができなかった。

近世社会では、死者の救済に関していえば神仏は脇役にすぎなかった。死者は神仏によって救われるのではない。縁者によって繰り返される長期の供養によって、この世で抱えていた生々しい憎悪や怨念を脱色し、無害で穏やかな「先祖」に変身していくことこそが死者の救いだった。こうした死生観を土台として、数十年もの長い時間をかけて死者を「先祖」にまで祀り上げるシステムと儀礼が構築されていった。

祀ってくれる者を失って「無縁仏」となる恐怖の肥大化と社会への浸透は、こうした近世的な供養システムの整備・普及と表裏の現象だった。そのため近世社会においては、そのシステムから漏れた死者を救い取るための無縁仏供養がきわめて切実な課題となった。中世以前にも「無縁」の霊の供養は行われたが、それはもっぱらプロの僧侶や行者の役割だった。それに対し近世社会では庶民の年中行事のレベルにおいて、先祖供養と並行して、お盆の「無縁棚」などのようにさまざまなバリエーションをもって実施されることになったのである。

柳田國男が論じ、多くの研究者が祖述してきた山に宿る祖霊のイメージは、けっして古代以来の日本の伝統的な観念ではない<sup>3)</sup>。人々が絶対者による救済を確信できなくなった近世以降に、徐々に形成された思想だったのである。

## 4 復讐する死者

しかし、そうした契約にもかかわらず、近世では冷酷な殺人と死体遺棄、供養の放棄など、生者側の一方的な契約不履行は跡を絶たなかった。そのため、恨みを含んで無秩序に現世に越境する死者も膨大な数に上った。これが江戸時代の幽霊の実態だったのである。

冒頭で言及した有名な「東海四谷怪談」のお岩や「皿屋敷」のお菊は、い



ずれも生者の残虐な仕打ちによって死を迎えた女性たちだった。彼女らはなんの落ち度もないにもかかわらず命を奪われ、その死体は墓に埋葬されることのないまま放置された。供養が行われることもなかった。やがて幽霊と化した彼女たちによる激しい復讐が開始され、迫害に加担した人物がみな死に絶えるまでそれは止むことがなかった。めずらしく男性の幽霊である「こはだ小平次」も、妻とその愛人によって殺害された人物だった。

ここで一つ、江戸時代の幽霊の話を少し詳しく紹介したい。17世紀に出版された『諸国百物語』に収録された、安部宗兵衛という人物の妻の話である<sup>4)</sup> [図版2]。

宗兵衛はその妻を虐待し、ろくに食物を与えることがなかった。妻が病気になっても薬を飲ませなかったため、彼女は19歳の若さで死亡した。死の間際に妻は、この恨を「いつの世にかは、忘れ申さん。やがて思ひ知り給へ」といつて亡くなったが、宗兵衛は死体を山に捨てて弔いをするのがなかった。すぐに妻のことを忘れて、愛人と一緒に生活を始めた。

妻が死んで7日目の夜中のことである。宗兵衛が愛人と寝ていると幽霊になった妻が恐ろしい形相で現れ、愛人をばらばらに引き裂いた。その上で、「また明晩参り、年月の恨み申さん」という言葉を残して姿を消した。

宗兵衛は恐怖にとらわれ、僧侶をよんで祈祷を行い、翌日の夜には弓や鉄砲までを用意した。しかし、幽霊にはなんの役にもたなかった。現れた妻の幽霊は宗兵衛を二つに引き裂き、周りにいた下女を蹴り殺し、天井を破って空に上っていった……。

宗兵衛の妻が幽霊になった理由は、理不尽な死と供養の放棄だった。死者に対する義務を果たさない夫に復讐すべく、妻は死者の世界を抜け出して生者の日常空間に



図版2

越境し、容赦ない復讐を果たすのである。仏教もその恨みをとめることはできなかった。結末は復讐の完結であり、幽霊が最後に宗教的レベルでの救済をえることはついになかったのである。

もう一つ紹介したい例は、元禄年間に板行された『善悪報ばなし』に収められたものである<sup>5)</sup>。瀬助という人物の美人妻に横恋慕した当地の代官が、ささいな罪をあげつらって瀬助を流罪に処し、その妻を我がものとするという事件があった。瀬助はその道中に死亡してしまった。これを喜んだ代官だったが、妻が代官の屋敷に入ってから、その周囲に瀬助の霊がまわりつくようになった。山伏をよび、神明に祈祷しても、いっこうに改善される兆しはなかった。逆に瀬助の霊の跳梁ぶりはエスカレートし、ついに二人とも取り殺されてしまうのである。ここでも、幽霊はその復讐を完遂し、恨みを果たし終えるまで、出沒をやめることはなかった。

これとは逆に、きちんとした供養を受けて死者が心を和らげ、墓に定着するケースもあった。同じ『諸国百物語』に収められた話である<sup>6)</sup>。京都府の亀山に大森彦五郎という侍がいた。その妻はたいそうな美人で、彦五郎は妻を愛していたが、お産のときに命を失ってしまった。その後独り身を通していた彦五郎は、周囲の強引な勧めで3年後に再婚した。この後妻はたいへん良くできた人で、亡くなった最初の妻を毎日懇ろに供養した。

最初の妻は双六遊びが好きで、なくなった当初、毎夜幽霊となって出てきては下女と双六遊びをしていた。だが、やがて周囲の心遣いに感じて現れることをやめた。後妻は双六の盤を作って、最初の妻の墓に供えた……。

この世に執着をもって出沒していた幽霊も、関係者がきちんとケアすれば、墓に落ち着いてさまよい出ることがなくなるのである。

以上みてきたように、近世の幽霊の大半は、もとはごく普通の人々だった。生者が約束を守って供養を継続すれば、死者はおとなしく墓に留まるものと考えられていた。しかし、生者が契約を破棄して無残な仕打ちを加えたとき、死者はたちまち恐ろしい幽霊となって、生者の世界に越境してくるのである。それぞれの幽霊は明確な復讐の対象をもっていた。その復讐が遂げられないうちは、どのような対応をとっても幽霊は決して満足することがなかった。仏の力をもってしても、その怨念を防ぎ留めることはできなかったのである。

中世にも未練を残してこの世をさまよう死霊はいた。平安時代の上流貴族

の源融は、みずからが精魂込めて作り上げた邸宅に執着して、死後もそこに住み続けたという（『今昔物語集』<sup>7)</sup>。

中世初期に編纂された『法華驗記』と『今昔物語集』には、立山の山中で若い女性が霊となって出現し、修行者に救いを求める話が収められている。仏物を流用した罪で立山の小地獄に堕ちたこの女性は、行者に対し、みずからの滅罪のために法華經の書写を行ってくれるよう、近江の国に住む父母に伝言することを依頼した。行者の言葉にしたがって両親が書写供養を行ったところ、父と行者の夢に美しい衣服を着けた娘が出現し、合掌して「法華の力、観音の護助によりて、立山の地獄を出でて、忉利天宮に生れたり」と告げたという（『法華驗記』による<sup>8)</sup>）。

立山の女が願ったのは、だれかに対する復讐ではなく、仏の力による地獄からの脱出だった。そこを脱した女性は、もはや現世に留まることはなかった。彼女は最終的な浄土往生の前段階として、この世により近い天界に上るのである。

中世の死霊のほとんどは、生前に権力をもち栄華を極めるなどした特別な人物だった。そのエピソードの結末も個人的な復讐の完結ではなく、仏による救済であった。他方、近世の場合、ごく普通の庶民だれもが幽霊になる可能性をもっていた。また、その遺恨の解消に超越的な救済者を介しない点において、救いから疎外されて苦しむ中世の死霊とは異質だった。

近世の幽霊はもはや宗教的な救済などは求めなかった。その目的はただ一つ、自分を無残に殺害して放置した相手に対する仮借ない復讐だった。この世で抱え込んだ負の感情の解消だった。かくして近世においては、世俗社会の人間関係をそのまま反映する怨念に満ちた大量の幽霊が誕生することになったのである。

## 5 心中の思想

近世社会の特質として、生前の人間関係の葛藤や怨念がそのまま死後の世界にもちこまれ、それが解消しないうちは死者の安らぎが実現しないと考えられていたことを指摘した。このように捉えたとき、たいへん興味深いもう一つの事例がある。世話浄瑠璃の心中物にみられる死後の世界の観念である。

江戸時代のもっとも著名な脚本家である近松門左衛門の代表作に、「曾根崎心中」がある。大坂蜷川新地天満屋の遊女お初と、恋人徳兵衛との心中を描いたこの作品は、お初の大坂三十三所観音霊場巡りから始まるが、その冒頭の記述は次のようなものだった。

げにや安楽世界より、いまこの娑婆世界に示現して、我らがための観世音仰ぐも高し高き屋に、登りて民の賑はひを、契り置きてし難波津や<sup>9)</sup>。

また、道行きの果ての心中の場面では、お初に「神や仏にかけおきし現世の願を今ここで、未来へ回向しのちの世もなほしも一つ蓮ぞや」<sup>10)</sup>といわせている。

こうした言葉をみると、この作品の基調には中世以来の浄土信仰があり、徳兵衛とお初が心中を遂げるのも、観音菩薩の導きによって死後二人そろって極楽浄土に往生し、一つの蓮華座を分けあうことを最終的な目標にしている、と読みたくなるところである。しかし、同様の概念をちりばめながらも、「曾根崎心中」の世界観は、中世の浄土信仰のそれとはまったく異質である。

なによりも「曾根崎心中」は、浄土往生による宗教的な救済に究極の価値を置いていない。もし二人が真に浄土を願うのであれば、そのためのしかるべき手続きが求められる。中世であれば、臨終の舞台には名の知れた霊場がもっとも望ましかった。自宅であっても臨終間際のすべての営みは、往生という究極の目的実現に振り向けられる必要があった。周囲は可能な限り清められ、香が焚かれ念仏の声が響くなかで、心静かに安らかな臨終を迎えることが理想とされたのである。

それと対比したとき、徳兵衛とお初のケースはまったく対照的である。二人が心中の場に選んだ曾根崎の森は、浄土信仰とはまったくなんのゆかりもない所だった。刃物によってのどを切り裂き、血まみれのまま最後を迎えるという結末も、信仰の世界からはもっとも遠い行為だった。二人が心から望んだことは、来世での救いではない。二人が結ばれるというこの世で叶えぬ願いの実現を、死という人間にとってもっとも重大な節目をとともにすることによって実感し、引き続いての死後の世界においてそれを継続していくこと

だったのである。

二人は心中の直前に人魂を目撃し、「二つ連れ飛ぶ人魂をよその上と思ふかや。まさしう御身と我が魂よ」(お初)<sup>11)</sup>、「今は最期を急ぐ身の魂のありかを一つに住まん」(徳兵衛)<sup>12)</sup>と語り合う。彼らが願う来世での合体は遠い彼岸での出来事ではなく、目の前を漂う人魂が寄り添うように、顕界と冥界の隔たりはあってもこの世の内で実現すべきものだったのである。

以上から、中世の浄土信仰と「曾根崎心中」、両者の死生観の相違は明白であろう。「曾根崎心中」は浄土を志向しているようにみえながらも、作品中の彼岸表象はきわめて希薄である。この作品の最期は、「誰が告ぐるとは曾根崎の森の下風音に聞こえ、取り伝へ貴賤群集の回向の種、未来成仏疑ひなきの恋の手本となりにけり」<sup>13)</sup>という言葉で結ばれているが、ここでいう二人が実現したという「成仏」は、宗教的な意味での悟りや救済ではなかった。分かちがたく結ばれたいという現世での願望が、死後の世界でようやく成就したことを指している。思いを遂げた二人が到達したのは、「仏」ではなく「ホトケ」だったのである。

こうした救済観念の変容は、近松の他の作品にも看取できる。『心中天網島』では、心中にあたって治兵衛に「西へ西へと行く月を如来と拝み目を放さず。只西方を忘りやるな」<sup>14)</sup>と述べさせている。しかし、他方ではもう一方の当事者である小春が、「たとへこのからだは鳶鳥につづかれてても、ふたりの魂つきまちはり。地獄へも極楽へも連れ立つて下さんせ」<sup>15)</sup>と語っている。二人が問題にしているのは、首尾よく西方浄土に行くことができるかどうかではない。実際には二人の行き先はどこでもよかった。その関心はただ一つ、この世で叶わなかった夫婦の契りを、心中という行為を経ることによって、来世で実現できるかどうかという一点だったのである。

私は先に近世の怪談を取り上げて、死者の安らぎは宗教的な救いにではなく、この世で身にまとった怨念を最終的に消し去ることができるかどうかにあることを指摘した。そこでは神仏の果たす役割は、きわめて限定されたものになっていた。心中物においても、冥土に旅立つ二人が願ったことは、神仏による救済ではなく、この世で叶わなかった世俗的な願望の実現だった。二人はその成就を死後の世界に託し、みずから命を絶つのである。

こうした死生観の背景には、近世人が共有していた、人は死後もこの世に留まるという認識と、現世の投影としての死後世界のイメージが存在した。

近松のいずれの作品にもその根底には、彼岸世界と根源的な救済者の観念が縮小し、現世の生活と人間の愛憎が浮上する、近世固有の世界観を見出すことができるのである。

## おわりに

日本文化に関する概説書を読むと、しばしば日本人の死生観の特色について記述してある。ほとんどの本で、死者は遠くに去ることなく、いつまでも身近な場所に留まるというのが日本人の伝統的な信念だ、という説明がなされている。

この通説の源流は、民俗学の祖とされる柳田國男の説にあった。日本人の死生観・靈魂観を論じた柳田の代表的著作である「先祖の話」<sup>16)</sup>のなかで、柳田は亡くなった先祖を身近な存在と捉え、それとの日常的な交流のなかで日々の生活を営む日本人の姿を描き出した。柳田によれば、霊が留まると信じられていた場所は山だった。死を迎えた人の魂は、生前の暮らしを営んだ故郷や子孫の生活を見守ることのできる山の頂に留まり、祭りのたびごとに家に迎えられた。

この柳田の説がもつ強い説得力の背景には、死者がいつまでも身近に留まるという観念が、今日においてもなお、多くの日本人にとってリアルに認識できる状況が存在するように思われる。墓参に訪れたとき、私たちはそこに死者の気配とその視線を感じとることができる。けれどもそれが、この列島上で時代をこえて受け継がれた「日本的」な感性ではなかったことはすでにみてきた通りである。

それは彼岸の絶対的存在に死者の救済を委ねることができなくなった、近世なってようやく形成された通念だった。仏の力で死者がみな遠い彼岸へと旅立った中世とは異なり、根源的存在による救済に対する信頼が失われた近世では、死者は親族縁者による長い時間をかけたケアによってのみ、生前に身にまとった世俗的な感情や欲望を脱色し、生者に害を及ぼすことのない穏やかで安定した「先祖」に上昇することができたのである。

柳田が見取り図を作り、多数の民俗学者や宗教学者がトレースした「身近な先祖」は、この列島の長い歴史のなかで、300年ほどの歴史をもつ新しい伝統にすぎなかった。それ以前には逆に、この世に留まる死者は不幸な存在

であるという観念が主流をなしていた。そうした世界観の断絶が、中世と近世における幽霊のイメージの顕著な相違となって現れることになった。一般人がだれでも幽霊になりうる時代は、死者が遠い世界に旅立つことをやめた近世以降になって初めて到来するのである。

私は本論の「はじめに」において、死が普遍的な問題であるゆえに、不幸な死者——幽霊の問題も時代と地域を超えた普遍的なテーマであることを指摘し、この問題を切り口とした比較研究の可能性について論及した。世界各地域を対象にした不幸な死者の研究は数多く存在するが、背景にある世界観やコスモロジーまでを視野に入れて、その変貌の実態をダイナミックに解き明かそうとしたものは必ずしも多くない。本格的な比較研究に至っては、ほとんど手もついていないような状況である。

この論考は日本列島をフィールドにした研究ではあるが、日本文化の特色としていたずらに幽霊の独自性を強調するのではなく、それを他地域と比較可能なフォーマット化して提示することを試みたものである。まだ試論の域を出ていないが、幽霊というきわめて興味深いテーマについての国境を超えた比較文化論的研究推進の一助となることを願いつつ、稿を終えることにしたい。

## 注

- 1) 以下の日本列島の死生観の変遷については、佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院、2008年）を踏まえて記述してある。
- 2) 増補史料大成『中右記』32頁。
- 3) 柳田國男「先祖の話」『柳田國男全集』13、ちくま文庫（初出1946年）。
- 4) 『江戸怪談集』（下）、岩波文庫、58～60頁。
- 5) 『江戸怪談集』（上）、岩波文庫、327～328頁。
- 6) 同、169～70頁。
- 7) 『今昔物語集』4、日本古典文学大系、480～81頁。
- 8) 『法華驗記』日本思想大系『往生伝 法華驗記』287～89頁。
- 9) 『曾根崎心中 冥土の飛脚』岩波文庫、16頁。
- 10) 同、45頁。
- 11) 同、45～46頁。
- 12) 同、46頁。
- 13) 同、49頁。
- 14) 『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島』角川ソフィア文庫、283頁。
- 15) 同、281頁。
- 16) 柳田國男「先祖の話」前掲。

## 参考文献

池田彌三郎『日本の幽霊』中公文庫、1974年（初出1962年）。  
諏訪春雄『日本の幽霊』岩波文庫、1988年。  
辻 惟雄『幽霊名画集』ちくま学芸文庫、2008年（初出1995年）。  
服部幸雄『さかさまの幽霊』ちくま学芸文庫、2005年（初出1989年）。  
『別冊太陽 幽霊の正体』平凡社、1997年。

## 図版出典

図版1：葛飾北斎「さらやしき」『別冊太陽 幽霊の正体』平凡社。  
図版2：「安部宗兵衛が妻の怨霊の事」『江戸怪談集』（下）、岩波文庫。



## Views of Life and Death in the Ghost Tales of the Edo Period

by Hiroo SATO

Many people would probably agree that ghosts are one of the most interesting subjects in Japanese thought and culture, and a subject that has always drawn interest from abroad. In addition to considering the remarkable popularity the ghost theme has enjoyed, another interesting perspective presents itself which involves a comparison of the ghost-related culture in different societies of the world. Because death is a universal phenomenon, the problem of the unhappy dead and ghosts appears throughout the world, across both geographical and temporal boundaries. Therefore, with ghosts being established as an important focus for scholarship, the author offers one perspective on the topic in this paper. In this article, the question of why ghosts and ghost-related culture came to be so popular in the Edo period will be addressed.

It goes without saying that fearful tales of the dead have been told in all periods and places. On the Japanese archipelago, however, the majority of these tales have their origins in the early modern period or later. Why is it that ghost stories and tales of the supernatural in Japan emerged predominantly in the early modern and modern periods, when society was undergoing a process of secularization? The author will answer this question by a comparison of the customs of the Japanese medieval and early modern periods, taking account of the changes which occurred relating to tombs and funerary practices. In searching for the cause of the large-scale emergence of ghosts in the early modern period, the author will also highlight the shift in Japanese cosmology which occurred between the medieval and early modern periods.